

日本における中国ウイグル族の 生活実態に関する考察

安瓦尔 安蒂娜

はじめに

中国の経済体制改革・対外開放政策がとられる1978年から、日中交流が本格的に始まり、この背景の下で80年代から中国大都市出身者を中心とする日本留学という現象が始まった。90年代に入って、この現象が中国各地に広がると共に、国費留学という公的派遣ばかりではなく、私費留学や留学生親族の親族訪問などによる渡航も認められるようになった。中国系移住者の大量の流入はホスト社会としての日本社会に様々な変容をもたらし、その一方、移住者自身にもホスト社会に適応するための文化変容が見られた。異なる文化習慣やアイデンティティを持つ移住者は日本社会の主要構成員と区別できないくらいの文化変容を起こした。このことは、興味深い課題になり、多くの研究者の注目を引いた。

しかし、日本にいる中国人の生活形態、生き方及びネットワークの生成などに関して、その研究対象となる「中国人」という概念は今までの研究において、中国の主民族である漢民族を指すものが一般的である。ところが、このような「中国人」＝「漢民族」という捉え方は、あまりにも不十分である。なぜなら、中国は56の民族から構成される多民族国家であり、中国人というのは、この56の民族からなる人々の総称であるからだ。日本在住中国人の中では、漢民族が主流であるが、千差万別の文化的、歴史的、あるいは人類学的な背景を持つ少数民族も一部存在する。そこで、本研究は従来の研究成果を踏まえながら、漢民族以外の少数民族、特に筆者の出身民族であるウイグル人の日本在住に焦点を当てたい。本稿は主として独自の歴史、文化、言語、宗教を擁している中国のマイノリティであるウイグル人が日本においてどのように自分たちの生活世

界を生成、展開させているのかという問題を具体的に取り上げて、彼らの日本社会におけるその異なる適応方式、異なる生活手段等を解明し、人々に海外在住の「中国人」を理解するもう一つの視点を提示してみたい。

一、ウイグル人の出国

新疆ウイグル自治区は中国の西北部の辺境地域であり、ユーラシアの中心部に位置する。中国の行政区分で最も国境を接している国が多く、その数は、インド、パキスタン、アフガニスタン、タジキスタン、キルギスタン、カザフスタン、ロシア、モンゴル国の8カ国に及ぶ。多数の国と国境を接している地理的な条件があるだけに、ウイグル人にとって、出国と移住は古くから馴染みのないことではなかった。ウイグル人の出国をたどると、多様であるものの、主に四つのタイプにわけることができる。

その一、中央アジアへ移住したウイグル人

新疆の北疆¹のイリ地方と国境になっている旧ソ連領セミレチュ地域（カザフスタン東南部）と南疆カシュガル西方に位置するフェルガナ盆地東部（ウズベキスタン及びキルギスタン）にウイグル人が集団的に居住している。彼らは19世紀—20世紀に新疆から移住した人々及びその子孫である。1881年に露清によって締結されたサンクト・ペテルブルグ条約で、一時的に露の支配の下に置かれたイリ地方が清朝に返還される。この際、イリのウイグル人の大部分がロシア領セミレチュに移住した（彼らが現在のカザフスタン在住ウイグル人社会の母体に当たる）。中ソ論争を機に、中ソ国境地帯を緊張状態が走ったために、イリ地域から数万人規模の第2次の移住が行なわれた。一方、フェルガナ盆地に居住するウイグル人の起源は必ずしも明確でない部分があり、18世紀半ばの清朝による新疆の征服の際に西方へ逃れた人々に遡る可能性もあると推定されている。17～18世紀半ばにカシュガル方面で勢力を振ったイスラーム聖者の

1 新疆のほぼ中央に位置する天山山脈は新疆を南・北と二分し、南地域を南疆、北地域を北疆という。また、天山山脈の東の部分を東疆と呼ぶ。地理的には、東疆は南疆の一部になるが、社会構造が北疆に近いことによって北疆と一緒にすることが多い。

一族であるカシュガル＝ホージャ家の末裔、ジャハーンギール・ホージャという人物が、1820年代に亡命先のコーカンド＝ハン国から清朝領に侵入し、政権を樹立する事件を起こした。これを清朝が鎮圧した際に、カシュガル方面から逃れた人々も、フェルガナ在住ウイグル人の先祖の一要素と見なされる。また、1960年前後にも一定規模が移住したといわれている²。

その二、親族訪問による出国

ウイグル人の旧ソ連への大規模の移住は、肉親が両地域にわかれて居住する現象を引き出した。60年代に中ソ関係の悪化につれ、国境が閉鎖され、肉親が離れ離れにならざるを得なかった。その後、中ソ外交関係の回復と中国の改革開放政策によって、親族訪問や、貿易交易活動が承認され、新疆と中央アジアとの間の往来が活発化ようになった。国境を挟んだ両地域のウイグル社会の間における関係が深まると共に、ウイグル人の中央アジアへの渡航が頻繁に行なわれてきた。この傾向は、ソ連崩壊後、キルギスタン、カザフスタン、ウズベキスタンの出国が一層盛んに行なわれるようになった。

その三、メッカへの巡礼による出国

文化大革命が終了した80年代以降、中国政府は「宗教信仰の自由」という³政策を打ち出し、それに伴いイスラーム文化の復興が図られるようになった。このことによって、ムスリム信徒の義務としてのメッカ巡礼も可能となり、当時メッカを巡礼した中国のムスリム信徒は、4万余人に達したとされている。メッカ巡礼者の増加に対し、中国政府はメッカ巡礼を統一的に組織する制度を

2 <http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~shinmen/project/index.htm> (科研費研究プロジェクト—中央アジアにおけるウイグル人地域社会の変容と民族アイデンティティに関する調査研究)

3 新中国成立後、1954年の憲法において「宗教信仰の自由」の条例が規定される。1982年に改正された憲法(第36条)に「中華人民共和国の国民は、信教の自由を有する。いかなる国家機関・社会团体または個人も、国民に宗教の信仰または宗教の不信仰を強制してはならず、宗教を信仰する国民と宗教を信仰しない国民を差別してはならない。国家は、正常な宗教活動を保護する。いかなる人も、宗教を利用して社会秩序を破壊し、国民の身体・健康を損ない、国家の教育制度を妨害するなどの活動を行うことはできない。宗教団体と宗教事務は、外国の勢力による支配を受けない。」と規定される。

採用した。毎年巡礼の時期⁴に巡礼に赴くことを望む信者は、政府に申請し、選ばれた信者は巡礼団の一員としてメッカに赴く。巡礼の費用（一人当たり30000元以上）は自分で賄い、団体にアラビア語の通訳や保健医師が随行する。近年、出国の手続きの簡素化に伴い、ムスリム信徒の間で観光、親族訪問、ビジネスなどの形で、他国を経由してメッカ巡礼に赴くのが珍しいことではなくなった。しかし、最近メッカ巡礼には、国の組織団体が随行する場合に限る制度が定められている。

その四、留学形式での出国

20世紀初頭、新疆在住のロシア領タタール人とウズベク人が持ち込んだ新思想や政治潮流の影響は、新疆からロシア領への留学を促進した。その嚆矢は1904年のイリからアルマアタへの留学生で、やがて留学生たちはトルコのイスタンブールへ向かうようになったと言われている⁵。それは新疆の近代的な留学の萌芽と言えよう。20世紀の半ばに入ると、中国の全面的にソ連社会主義に見習うという背景の下で、理・工系科目を中心とするソ連への留学生派遣が盛んに行なわれ、行政単位の推薦と統一試験の選抜によって、優秀な人材が派遣された。そのうち少数民族のソ連への派遣は、ほんの一部を占めた。

もう一種の留学は、次に記述する中国改革開放後の80年代以降の英・米・日本などの先進国への留学である。本内容について、これから具体的に述べていくので、ここにおいては述べないことにする。

二、ウイグル人の在日概況

1、在日ウイグル人の特徴

前述のようにウイグル人の出国の形態に多様性が見られ、特に同じ宗教を持つ国あるいは歴史背景のもとで、旧ソ連領への出国がほとんどであった。欧米や日本という先進国は現地の人々にとってははるかに遠い場所であり、そのような非ムスリム国への出国は現実的なことではないように思われ、望む人もほと

4 ヒジュラ暦（イスラーム暦）の第12月の上旬から中旬にかけての時期に行なわれる。

5 間野英二『アジアの歴史と文化⑧』1999 p 183

んどいなかった。80年代中国の留学生派遣体制のもとで、中国の少数民族エリート養成のための派遣は、当時の海外留学派遣生のわずかな部分でしかなく、派遣対象も、教育機関で勤める教員に集中した。その後ウイグル人の出国は従来のイスラム国家やそれに関係する国家への出国から非イスラム先進国への出国に転換しつつあった。筆者はウイグル人の日本への移動を以下のように二種類に分けて、まとめることにする。

まず一つ目は、高等教育を受けた少数民族エリートの来日。中国海外派遣政策が実施した80年代に、各少数民族地域から自民族文化に詳しく、理工・医学専攻を中心に、優秀な少数民族人材の海外派遣が求められた。彼らは国家が行なう面接などの試験を通じて、厳格に選抜された。選抜された人の大半は、まず一年間の公費派遣を経験し、その後在留を延長するケースもあれば、一旦帰国後再び来日するケースもあった。彼らの帰国は派遣条件の一つであり、彼らの帰国後は、少数民族地域での活躍が期待された。この時期に派遣されたウイグル人はほぼ高等学歴を有し、精選された人材であったため、来日後も学業の習得に専念し、成績を上げたものが多かった。ただし、この時期来日した人の帰国率がかなり低く、そのまま米国など発達した国家への移住率が高かった。また、人数が少なかったため、社会的なネットワークは形成せずに、各個人の生活圏＝日本人の生活圏、日本地域社会と深く関わっていた。日本語と日本文化の習得は、彼らにとって使命と言えるものでもあった。それゆえ、彼らの日本語のレベルは高く、日本文化を理解していることはこの時期のウイグル人留学生の最大の特徴である。そのほかに、挙げられる特徴は、彼らには日本社会への適応が早く、日本との間に摩擦が少ないことである。

二つ目は、自主的に来日した私費留学層である。来日したウイグル人留学生には、依然として公費派遣の留学生が存在しながら、1984年以降私費留学を認める政策によって、自主的に来日した私費留学生が急増しつつある。自主的な私費留学生は、次の三つのタイプにまとめられる。

- 1) 高等教育を受け、教育機関、国家機関などにおいての就職経験がある人々である。彼らの多くは、都市部出身で、新疆のウラムチなど漢族集住地域、或いは中国の内地の大学卒業生であり、キャリアアップするために来日した人々である。その中に国家派遣の選抜に落選した人も含まれる。

彼らの留学方式は大体2種類があり、ひとつは日本語学校の日本語学習を経て大学院に入学する方式。もうひとつは、日本の大学へ一年間の共同研究員として来日し、大学院試験を経て、日本での留学期間を延長する方式である。また従来の理工・医学を優先とした留学は、経済・法律などの社会科学や文学系留学に拡充してきた。

- 2) 中国で大学卒業後ただちに留学する人々、あるいは就職を待ちきれないで、就職経験がないまま留学する人々である。現在のような中国の市場経済優先という競争社会において、就職難はますます深刻な問題となってきた。特に、新疆のような少数民族地域において、中国のほかの地域との意識疎通を考えた中国政府は、就職のための漢語水準を定めた。しかし、新疆のウイグル人集住地域からの学生の漢語水準は低く、当然競争力が劣る。従って、就職を断念し、外国留学を一つの選択肢として考える人が増加しつつある。この方式で来日した人のほとんどの場合は、日本語学校での語学学習を経て、大学院に進学するが、漢語が弱いため、口語が上手で、漢字が多く含まれている書き言葉に劣っていることが考えられる。
- 3) 大学を中退し、あるいは高校卒業後ただちに留学した人々である。彼らの場合には、来日動機や背景に多様性が見られる。まず、就職難問題は、現役の大学生に衝撃を与え、大学卒業しても職場がないと考え、大学を中退し、ほかの進路を求める学生が現状においては少なくない。そこで就職にあたって有利になる海外の大学における学位の取得は、就職難を解決する一つの手段として魅力に富んでいる。また、中国の大学進学難、学費の高騰、大学を卒業しても職には就けないなどの問題を配慮し、子供を海外に行かせる親も多い。次に、親が日本において学業を続けていたり、あるいは、学業を終え、日本で就職して、中国に残してきた子供が高校を卒業した段階で、子供を日本に呼んだケースもある。このような形で来日した人は、来日後ギャップを感じる人が極めて多いと思われる。なぜなら、彼らは中国の「計画生育」政策（一人っ子政策）のもとで生まれた世代であり、大事に育てられたからである。また、それだけに、彼らには、社会経験が少ない。そのため、日本への適応が遅く、

厳しい留学生活に対し、カルチャー・ショックを受けやすい。しかし、彼らは大学で日本語を学習するために、日本語により優れているケースもある。

2. 基本属性

筆者は年齢・性別、出身地、在留資格などの項目に基づいて、在日ウイグル人のうちの30人に対し調査を行なった。まず、調査対象の基本属性と背景は以下の表に示すとおりである。

	性別	年齢	出身地	母国学歴	学校所在地	第一言語	第二言語	母国での職業	来日年数	来日方式	来日動機	在留タイプ (留学生のみ)	
社 会 人	1	男	45	イリ (北疆)	大学	ウルムチ	漢語	ウイグル語	大学教師	20年	国費	研修	
	2	女	43	ウルムチ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	大学教師	20年	国費	研修	
	3	男	45	イリ (北疆)	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	大学教師	18年	私費	研修	
	4	男	40	トルファン (東疆)	大学	内地	ウイグル語	漢語	公務員	15年	私費	日本での就職	
	5	男	38	トルファン (東疆)	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	公務員	7年	私費	技術の習得	
	6	男	36	ウルムチ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	銀行員	10年	私費	日本での就職	
	7	女	36	ウルムチ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	公務員	10年	私費	日本での就職	
	8	男	35	ウルムチ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	公務員	10年	私費	日本での就職	
	9	男	35	アクス (南疆)	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	教師	7年	私費	日本での就職	

留 学 生	1	男	33	コムル	大学	内地	ウイグル語	漢語	大学教師	7年	私費	キャリアアップ	大学院(博)
	2	男	36	アトシユ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	大学教師	6年	私費	高学位	大学院(博)
	3	男	36	イリ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	公務員	4年	私費	高学位	大学院(修)
	4	男	35	イリ	大学	ウルムチ	漢語, ウイグル語	英語	大学教師	7年	私費	高学位	大学院(博)
	5	男	35	ウルムチ	大学	北京	ウイグル語	漢語	大学教師	6年	私費	高学位	大学院(博)
	6	女	35	ウルムチ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	大学教師	7年	私費	高学位	大学院(博)
	7	女	37	ウルムチ	大学	北京	ウイグル語	漢語	大学教師	6年	私費	高学位	大学院(博)
	8	女	37	ウルムチ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	公務員	8年	私費	高学位	大学院(博)
	9	女	33	ウルムチ	大学	北京	漢語, ウイグル語	英語	公務員	7年	私費	高学位	大学院(博)
	10	男	33	ウルムチ	大学	北京	漢語, ウイグル語	英語	公務員	6年	私費	技術習得	大学院(博)
	11	女	33	ウルムチ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	公務員	5年	私費	高学位	大学院(修)
	12	男	35	ウルムチ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	大学教師	7年	私費	キャリアアップ	大学院(博)
	13	女	30	ウルムチ	大学	ウルムチ	漢語	ウイグル語	公務員	5年	私費	高学位	大学院(修)
	14	女	28	トルファン	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	公務員	4年	私費	高学位	大学院(修)

留 学 生	15	女	37	ウルムチ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	大学教師	2年	私費	高学位	大学院(修)
	16	女	33	イリ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	会社員	3年	私費	高学位	大学院(修)
	17	女	30	ウルムチ	大学	ウルムチ	漢語	ウイグル語	公務員	6年	私費	高学位	大学院(修)
	18	男	33	ウルムチ	大学	ウルムチ	ウイグル語	漢語	大学教師	6年	私費	キャリアアップ	大学院(博)
	19	男	28	ウルムチ	高校	ウルムチ	ウイグル語	漢語	スポーツ選手	3年	私費	学位	大学
	20	男	25	ウルムチ	高校	ウルムチ	ウイグル語	漢語	無職	3年	私費	学位	大学
	21	男	25	ウルムチ	大学中退	ウルムチ	ウイグル語	漢語	無職	3年	私費	学位	大学

以上は今回の調査対象である。まず性別と年齢を見ると、30-37歳の人が最も多く、一位となっていた。その原因は、80年代の後半から中国が改革開放の必要に応じて、国費留学生派遣政策の外に、さまざまな国家私費留学生政策を登場させたこと、90年代に入って、留学生派遣政策の成長期を迎えた機会に、留学しやすくなったことである。即ち、留学政策の簡素化に従って、留学年齢層が徐々に若く変化してきたと考えられる。

被調査者の出身地を見ると、新疆の首都であるウルムチ出身者が一番多い。北疆や東疆の中心都市の出身者がその次となる。南疆出身者はまだ少ない段階である。

表には社会人と留学生に分けているが、在日ウイグル人は家族滞在を除いて、ほぼ全員が留学資格で入国し、在留学形態には単一性があり、ほとんどの人が日本語学校での日本語学習→大学への進学（大学院を含む）→就職あるいは帰国という段階を歩む。今回の被調査者では、大学院生が最も多い。それは先に述べたように、中国の私費留学制度の開放化によるもののほかに、大学院の学

位は昇進に深く関わるので、学位をアップするために、大学院への留学を選択する人が多くなるという現象をもたらした。

被調査者には社会人、大学院生、大学生が含まれるが、彼らの違いは単に在留資格の違いにとどまらなかった。出身地域、経済状況、年齢、学歴の差異にもとづいて、来日後の生活や学業、適応能力にもその差異が明らかになっている。次の章において、各個人のケースを具体的に取り上げ、その差異を考察していきたい。

三、在日ウイグル人の生き方の実例

本節では、個人の具体的なケーススタディーを通じて、ウイグル人が日本にやってきてから、如何に生きているのかを考察していきたい。ここで取り上げるウイグル人は、自民族の価値観と、背景としての中国社会の価値観の影響を受けてきた存在であり、かつ民族地域、国境の二重境界を越え、新たな環境、つまり日本にやってきた存在である。そのようなわけで、以下の考察においては、在日ウイグル人の文化的複雑性を考慮しながら、論述を進めていきたい。それらの実態を以下の二つの事例を通じて、見てみよう。

ケース1 男性

新疆ウイグル自治区イリ出身。母国では大学の教師だった。1985年に新疆ウイグル自治区教育委員会と日本の私立大学協会の合意により、選抜された13名の派遣留学生の一員として、一回目の来日を果たし、修士の学位を得た。その後、一旦帰国して、4年間大学教師の仕事をした後、また国費派遣によって来日した。来日のきっかけは外国で技術の習得をしたかったことである。来日当時、留学生の数が少なかったため、奨学金が受けやすく、アルバイトも見つかりやすかったために、経済的に今の留学生の生活状況より恵まれており、研究に専念できる時代であったという。一方、第一期ウイグル人留学生であったために、あらゆる情報は自分で取得しなければならなかった。

現在、日本の博士課程の学位を得て、日本の私立大学で教授として勤めている。同じウイグル人の妻、子供3人と暮らしている。彼は、二回目の来日後、

生活が安定してから、母国で医科大学付属病院の看護師だった妻を呼んだ。妻は日本語を習得後、知り合いの産婦人科で働き続けていた。彼は、妻が日本の生活に慣れるまで、新疆ウイグル自治区で生まれた長男と長女を一時的に妻の実家に預けた。次女は日本で生まれた。彼は日本にいるウイグル人、とくに関西京都地域在住のウイグル人にとって、頼りがいのある存在である。彼は、日本で学習したい人に、日本に来るチャンスを与え、また、日本に来たウイグル人にアルバイト先を見つけてやるなど、多くのウイグル人の面倒をみてきた。

彼の一家の生活をより生のまま記録したいために、筆者は彼の家に3日間住み込み、彼らとまったく同じ生活を送っていた。筆者が尋ねた際、彼は転勤準備をするなど、多忙な時期だったため、最初は本人とのインタビューができず、代わって妻がインタビューに答えてくれた。妻とのインタビューは以下の通りである。

「息子を出産する前に、主人は日本に旅だった。そのとき、彼1人で勉強しに行き、自分は国に残って、育児したり、親孝行するのが当たり前だと思っていた。しかし、彼がいない中、仕事しながらの育児生活は大変で、彼がいつ帰ってくるかと期待していた。彼の日本での生活が安定した後、私が日本に呼ばれた。私はまず日本語が出来ないと、子供に苦勞させてしまうと思い、息子と娘を一時的に実家に預けた。私が日本に来た頃、日本語が話せず、子供も傍にいないから、寂しかった。私は、一年間日本語学校で日本語を勉強し、また、主人の知り合いとの付き合いを通じて、少しずつ日本語を話せるようになった。二年後、まず8歳になった息子を日本に呼んだ。主人が学校に通い、大変忙しかったので、家事や育児は私が背負った。勉強に苦勞する主人と、息子が二人で寂しく夕飯を食べる様子を見ると、悲しみが込み上げる日も度々あった。息子が保育所に入って、夫の学業も順調に進み、生活がより安定した後、4歳になった娘を日本に呼んだ。二人の子供の育児に精一杯で、とても忙しく感じた。

私はその頃、家の近くの外科病院で勤めだした。しばらく経ってから、知人の産婦人科で勤めるようになった。当時、外国人は看護師の資格を取れなかった。やはり、資格がないと、本格的な医療の仕事が出来なかった。

そして、3人目の子供を日本で出産した。日本語もマスターし、日本に大分慣れたために、次女の子育てはそう大変なものではなかった。それに日本の出

産・育児は故郷と違うので、かえって、とても楽しく感じた。私も歳をとり、子供の成長につれて、気を配ることがもっと増えてきたので、現在では、看護師の資格が取れるようになったが、その資格を取るのを断念した。

今、長男は大学で勉強している。長女は高校生で、次女は小学一年生である。私は、子供のために、保育所の時から、運動会、遠足などの行事に積極的に参加してきた。子どもを塾に行かせ、科目以外にピアノを学ばせたり、日本人とほぼ同じような育児をしてきた。金銭的や精神的な負担もあったが、幸い子供たちの成績がよく、長男は大学に入ったし、長女が英語スピーチ大会に進出したり、描いた絵が展示されるなど、頑張ってくれた。

ただ、育児において、一番頭を悩ましたのが、自分の言語、自分の文化をどうやって身につけさせるかということである。子供たちは多くの時間を、保育所や学校で過ごすため、流暢な日本語を喋る。だから、家の中では、私たちは子供のために、日本語で話しかけることが多いが、自民族の言葉を覚えて欲しいということもあって、ウイグル語でも話すことがある。そのため、子供たちは、ウイグル語を聞き取れるが、喋るほうは日本語が一番上手という状態になっている。中国語（漢語）はほとんど喋ることができない。どうしても、下の子は上の子に付いて日本語で喋るので、子供たちの間では日本語の会話がほとんどである。やはり、子供たちに自民族のことを意識させたいため、私たちが取った行動は、長男を中国の大学に一年間語学留学をさせることであった。また、在日のウイグル人留学生を家に呼んで、子供たちに、ウイグル語で話かけてもらったり、自民族の踊りを教えてもらったり、いろいろな工夫をした。

しかし、家で自民族教育に気をつけているにも関わらず、学校においては日本の教育を受けており、周囲の環境がすべて日本スタイルなので、子供は自民族のことを意識していても、考え方や行動は日本スタイルになってしまう。国に帰ったとき、ギャップを感じることもある。例えば、ウイグルの主な料理材料となる羊肉が苦手で、ほとんど食べてくれないなど困ったことがある。

今の若い留学生を見ると、自分の子供も彼らのように、自立して、頑張ってもらいたいと思う。彼らを見ると、本当に日本に来た頃の自分たちを思い出す。彼らも今、当時の私たちのように苦勞しているかもしれないが、たゆまない努力をすれば、上手くいくと思う。

私たちが国に帰ることを考えたことがあったが、子供の将来を考えると、まだしばらくは日本にしようと思いましたが、今、国に帰りたいのかと聞かれたら、遊びには帰りたいけど、日本の生活を放棄してまで、一家でウイグルへ帰ることをしたくないと答える。日本に来て、さまざまな苦勞をしたが、日本に来てよかったと思う。」

次の日、仕事から帰ってきたご主人にインタビューができた。事前に用意した調査票に沿って、質問した。回答は以下の通りである。

「私は第一期ウイグル人留学生である。以前は新疆ウイグル自治区から海外へ派遣された人がいなかったの、当時13人の中の1人に選ばれて、とても光栄で、嬉しかった。その時から新疆と日本の交流が深まってきて、現在の日本各地のウイグル人の数は、何百人くらいに至った。私たち13人はウイグル人留学生の第一陣であった。

当時、私たちの育った環境、すなわち、中学校まで日中外交関係を結ばなかった時代には、日本人との付き合いがなかったの、日本については、科学技術が非常に発達した国というイメージしかなかった。日本を知るようになったきっかけが、高倉健主演の「君よ憤怒の河を渡れ」（「追捕」は中国名）という映画を見たことである。

私は、日本語を国費派遣の留学生対象に行なわれた日本語集中講義で学んだ。その講義は、新疆から遠く離れた長春で行なわれたものである。それは大体8月くらいであり、教えてくれたのは、戦前日本に留学したことがある中国人の老人だった。私は新疆の漢族学校で教育を受けたので、日本語を勉強するうえでは、漢字部分がより易しく感じましたし、日本語の文法構造がウイグル語と似ているので⁶、日本語を身につけたのが早かったかもしれない。しかし、日本語で表現する時には、中国で学んだものはあまり役に立たなかった。特に、私たちが学んでいたのは、戦前の日本語であったために、すべてが敬語、丁寧語だったと思う。だから、私の日本語は、現代の日常会話に適應できるわけではなかった。

6 現代ウイグル語は、アルタイ系トルコ語に属し、膠着語として日本語、韓国語、モンゴル語と似ている。膠着語は、文法的な意味を表す接辞（助詞、活用語尾など）が実質的な意味を表す語（名詞や活用語の語幹など）に付属（膠着）する言語である。

一回目の出国の時を思い出すと笑ってしまう。当時は、パスポートやビザを取るために、北京で長期滞在しないといけなかった。今のように簡単に取得できるものではなかった。新疆ウイグル自治区教育委員会の方に付き添ってもらって、一ヶ月間北京で滞在した。ビザ取得の保証がなく、日本に行けるかどうかも未知数であり、どきどきする毎日だった。一回目の出国のときには、家族連れという意識がなかった。前例がなかったので、家族連れでも可能であることは知らなかった。しかも、経済的な条件もあったうえ、妻は勤め先から長期の休暇許可も下りないなどの悪条件が重かった。また、日本のこともあまり知らなかったために、家族連れということに対して不安だった。

日本の物価が高いことを承知していたから、服装や、日本で食するつもり新疆特産の食べ物をたくさん持って行った。しかし、食べ物は北京で滞在した時、パスポートやビザを取る間に全部食べてしまった。

来日してから、最初は食事に困った。ムスリムの私たちにとって、どんなものが食べられるか、どんなものが食べられないか、ハラール食品⁷がどこで購入できるか全くわからず、市販の鶏肉、魚を買って食べた。唐揚げをよく食べていた。買い物する時、食材の表示を一々チェックした。現在は、色々な食品が手に入るようになったので、今の留学生のほうがラッキーである。

また、気候にも慣れず、特に、日本の夏は大変だった。来て3ヶ月で、15キロ体重を落としたことがある。それは、食事、気候に慣れず、かつ精神的なプレッシャーがあったからである。特に、ここで学んだ知識は、国で学んだ知識と違い、すべてゼロからやり直さないといけなかった。講義に付いて行けるように、人一倍の努力をした。とにかく、日本に適応するには、時間がかかった。

一番困ったことは、やはり知り合いがいなかったことで、とても寂しかった。勉強以外にすることがなかった。当時中国では、電話が普及していなかったもので、電話ではなく、家族、親戚、友だちによく手紙を書いた。

日本に来て、地元の文化とかなり違うと思った。文化に関して、一番感心し

7 ハラール食品はイスラーム法的に合法的な食品。とくに、肉および肉製品についていう。イスラーム法では、天然の食物は原則としてハラールであるが、豚肉、死肉、偶像に捧げられた動物の肉、血などが禁じられている。牛、羊、鶏等についてはアッラーの名によって屠り、血抜きすることがイスラーム法で決められている。(出処：イスラーム辞典)

たのは、日本が自分の伝統文化を守りつつ、世界トップクラスで走っていることである。今ありがちなものは、当然新疆もそうであるが、伝統文化を捨て、すべて新しいものを吸収するという現象である。日本のこういうところは尊敬すべきであり、発展途上国のモデルになったらいいと思う。

日本に来て、自分は変わったと思う。まず、時間に対する認識が変わったことである。日本人はきちんと約束時間を守り、約束時間の10分前に既に現れたりする。一方、地元では時間に対する意識が薄く、2、3時間遅れるのは普通のことである⁸。次は、仕事に対する責任感である。日本人は仕事をきちんとし、成果を上げるのに力を尽す。地元でいた時、仕事が一応出来たら、それで満足していた。私は日本のそのような影響を受け、さまざまな成果を挙げられたと思う。しかし、日本人は仕事に尽すのはよいが、生活の味わい楽しさと仕事を組み合わせる必要があるのではないかと時に感じることもある。

仕事が忙しいので、来日してから、祭りなどウイグルの行事をほとんどしていない。ただ、祭りは日曜日などの休日なら、近くのウイグル人同士とモスクに礼拝にいったりする。それなりの意識を持っており、家では、祭り料理を作るなどのことはしている。祭り行事の情報は、国際電話を通じて教えてもらったり、あるいは、ここのウイグル人から情報をもらったりする。国にいた時も、民族の宗教慣習より学術研究のほうを重視していたので、日本に来て、祭りを騒ぐほど、宗教慣習を行なう意識はなかった。

妻が家のことを背負ってくれていたから、仕事に専念できた。育児に関しては、苦勞したが子供たちにいい環境を作ってあげたいと思う。今3つくらいの言語（英語・日本語・ウイグル語）がわかるし、日本の文化は私たちより詳しいし、将来中国、あるいは中央アジアと日本の架け橋になり得るだろう。彼らは、ただの専門科目ではなく、2国の文化を比較しつつ、幅広く知識を身につけたと思う。私たちが日本に長期在留している原因は、子供たちの将来、要するに子どもたちが大学を卒業するまでは動かないほうがいいと思ったからだ。また、家庭内の母国語教育のみの状態で帰国しても、向こうの教育に付いていけない。日本文化の薫陶を受けた子供たちを、ウイグル社会に入らせる自信が

8 とくに、結婚式、パーティなど大勢の人が集まる場、あるいは客として家に招待された時に、定められた時間より遅れていくのが、常識である。

ない。

子供たちが母国語、自分達の文化を忘れないように、ウイグル語で喋るなど工夫している。返事は日本語、流暢な京都弁で返ってくる。今ウイグル語の発音がおかしいが、直ると思っている。

子供への教育の配慮以外に、今手元にいくつかのプロジェクトがあるため、それをし終えてからの帰国を考えている。今40歳を超えている私にとって、故郷は2つある。それは、生まれ、成長し、人生の半分を過ごした新疆。もう1つは、20年余り滞在した日本である。」

娘たちにも質問をし、回答してもらった。

長女は「学校がとても好き。皆と一緒に遊びに行ったとき、いつも私がイスラーム教徒ということを知っていて、焼肉など豚肉料理がないレストランに連れて行ってくれる。当然、私は、外国人なので、いじめにあってないわけではない。とくに、9・11事件後、私がイスラーム教徒ということから、「人殺し」と言われたことがあった。その時、とても新疆に帰りたかった。しかし、今は成績がいいから、友達に勉強を教えたり、友達に日本のことを教えてもらったり、仲よくしている。小学校の夏休みに帰国した時、たくさんのウイグル人の友達とよく街で遊び、楽しいので、日本に戻りたくなかった。戻ってきても、皆で外で遊ぶことが少ないから、寂しく感じたこともあった。しかし、成長するにつれて、故郷の友達との話題が少なくなり、日本人の友達と一緒にいるほうが楽しく、日本の生活の方が気楽だと思うようになった。大学を卒業するまで、帰国は考えたくない。」と述べた。

ケース2 女性

新疆ウイグル自治区ウルムチ出身、母国では大学教師だった。2000年共同研究員として、日本の大学に就学した。一年間専攻を研究しながら、日本語を学習し、入学試験を通じて、私費留学生として正式に大学院に入学した。現在博士課程に在籍中であり、修士課程に在籍中に呼んだ夫と息子と暮らしている。来日したきっかけは、外国において高学歴を入手するためである。

彼女は「私は、母国で大学教師だった。学歴によって評価される大学の教育機関では、大学卒業だけでは、昇進するのが難しい。国内の博士学位を得た人

が増加した現状の中で、衆に抜きん出て、海外での学位の取得を目指した。しかし、大学の教育機関の国費派遣の指標は多いものの、その選抜が厳しく、職歴によって選抜されることが多いために、待ち切れなくて、日本にいる親戚に呼んでもらった。最初の1年間は共同研究員の身分で来たので、学費の支払いが必要なく、住まいも家賃が安い学生寮だったので、気楽に研究を進めることができた。一年後、大学院修士課程に合格し、在留ビザを私費留学生ビザに変更し、学費の支払いや生活費を稼ぎながらの留学生生活を始めた。当時、周りにウイグル人が少なかったために、情報はほとんど自ら入手した。

夫も母国で大学教師だった。競争がますます激しくなってきたので、日本でレベルアップしたほうがよいと思い、日本に呼んだ。経済的問題は、2人の学費が免除されたために、生活費に奔走するだけで解決できた。しかし、日本語専門学校での日本語学習の経験がなかったために、研究には苦勞した。また、日本で出産した。学業と育児が両立するのが難しいので、子どもを1歳まで新疆の実家に預けた。現在、2人は博士課程に在籍し、子どもを育てながら、学業を続けている。奨学金も受けているので、生活はより安定している。

現在、入国ビザの簡素化につれ、私費ウイグル人留学生が増えてきた。お祭りなどの時、皆で集り、お祭り料理を食べて楽しんでいる。ウイグル人同士の親戚などが日本に来た時、ウイグルの礼節によって、必ず家に招待する。周辺のウイグル人とよく交際している。

日本に来て、多くの日本人がウイグルのことをあまり知らないと感じた。日本人と交流を深めるために、学校や地域の国際交流活動に積極的に参加している。とくに、ウイグル人との交流を目的とする国際交流協会が開催したイベントなどに参加している。これらの国際交流活動を通じて、多くの日本人にウイグル文化を紹介しており、日本人に日本のことを教えてもらっている。また、日々忙しく、ウイグル人の皆がなかなか顔を合わせるができないので、このような日・ウイグルの交流会はウイグル人の集まり場としての役割を果たしている。新疆のことや日本でのアルバイト情報、奨学金の情報はここで得ることができる。

子どもの教育問題はまだ考えていない。将来帰国か、日本で就職かは、まだ未定なので、子どもの教育問題は、その時考えればいいと思う。日本の福祉制

度が充実しているのので、研究と育児が両立できた。

将来いずれ帰国するが、日本で学位を取得し、就職してお金を稼いでから、帰国したい。たくさん苦労して青春を失ったが、視野が広がって物事を深く考えるようになった。また、家族が異国で互いに頼りあって生きていくことの大切さがわかった。とにかく、日本に来てよかった。できれば長く住み続けたい。

夫は「私は母国で大学の教師、兼大学の行政事務関係の仕事をしていた。恵まれた仕事環境だったが、貴重な青年時代を消耗したくなかった。また、妻が結婚してすぐ日本に行ったので、夫婦が離れ離れというのもよくないと思い、私も日本に行った。

来てすぐ、日本が非常に発達しており、清潔な国という印象を受けた。大学は故郷から離れた中国内地で就学したために、すぐギャップを感じなかった。しかも来て既に日本の生活に慣れた妻と一緒に暮らしたので、馴染むのにはあまり時間がかからなかった。

しかし、途中で何度も帰国したいと思った。なぜなら、中国において勉強した知識が日本で通用しなく、研究の基礎が弱いために、日本人の学生と同じように研究するのが無理に思えたからである。しかしながら、奨学金に恵まれ、周囲の先生や友達に親切にしてもらい、学業を続けることにした。

現在ウイグル人の留学生が増えてきて、祭りなどの行事で顔を合わせることができるよう。しかし、研究やアルバイトが忙しく、祭りなどの行事が祝日以外の日であると、なかなか行けない。勉強の目的で来ているために、時間を割いてまで、そのような集まりに行く必要がないのではないかと時々考えてしまう。

現在、毎日研究室にこもっている状態であり、妻にも苦労をかけているが、このような大変な時期はいずれ終わると思う。学業を修了して直ちに帰国したほうがよいと思われるが、今中国においても競争が激しく、博士号を取得した人材も少なくない。一頭地を抜くために、日本で仕事の経験を重ねたほうがよいと思う。したがって、日本で、しばらく就職してみたいのである。」と述べた。

以上は在日ウイグル人、とくに家族を持つウイグル人の生き方の一端を示すものである。実は、筆者は本稿を執筆するために、ほかの在日ウイグル人に対しても、インタビューを行なった。インタビュー調査対象になったウイグル人を、子供がいる家族、子供がいない家族、単身と分類した。各個人ケースの具

体的な紹介によって、興味深い特徴を指摘できるが、紙面に制限があるため、ここでは、社会人と留学生のケースを一つずつ取り上げるだけにとどめ、別稿に記すこととしたい。

各在日ウイグル人の事例では、まず共通点として、アルバイトをしながら学業を続けていること。次に、日本での滞在過程は、日本語の学習⁹—大学（大学院）での学習—就職（帰国）という順番であること。また、家族がいる人は、夫婦のどちらかが先に来日後、後程家族を呼び寄せること。単身の人は一先帰国して結婚する、あるいは新疆で相手を求めること。子どもの教育は、日本スタイルとウイグルスタイル両方が重視されているが、中国語はできないことなどが取り上げられる。

また、彼らの来日後の経済状況、学習状況などは、中国のほかの地域から来た留学生と変わらない。中国留学生の在日状況は、先行研究によって明らかにされているために、ここでは扱わない。次節では、在日ウイグル人の適応問題及びアイデンティティの変化について考えてみようと思う。

四、在日ウイグル人の適応状況に対する分析

現在、日本にいるウイグル人は増えつつあるが、中国のほかの地域から来た人と比べると、依然として少ないのである。したがって、日本社会にとって、顔つきをはじめ、中国人らしくないウイグル人は珍しい存在である。一方、ウイグル人にとって、単一国民文化からなる日本社会において、自分の位置づけを把握するのが難しいのである。なぜなら、場合によって、国家（中国）の一員として扱われることもあるが、民族の（ウイグル）の一員として扱われることもあるからだ。自分のイメージがどちらに重点を置かれるべきか、場合にに応じて考えざるを得ないからである。

そういうわけで、日本において、中国人という「普通性」の中で、どのようにウイグル人という「個性性」を表現しているのかを、ウイグル人の日本生活の適応問題から考えてみよう。

9 日本語の学習は日本語学校での学習以外に、共同研究員のビザで来日し、直ちに日本の大学において日本語の勉強をするケースもある。

筆者が今回の調査を通じて、同じウイグル人であっても、出身地域や受けた学校教育によって適応方式が異なると実感した。

まず、日本語の把握状況である。

ウイグル人はトルコ系言語の現代ウイグル語を話し、表記にはアラブ文字を用いる。ウイグル人は古くから、トルコ系言語に基づく特有の文化を育んできた。日常生活をはじめ、ウイグル語は主導的な言語であり、家庭内の啓蒙教育の言語はウイグル語とする。国家政策の一環として、「民族学校」が形成され、民族学校における教育はすべてウイグル語で行い、第二言語は漢語とする。しかし、近年新疆において漢民族の大量移住によって、公的場では中国語（漢語）が共通語になりつつあり、人々の言語に対する意識は大きな変容を余儀なくされ、母国語教育もしだいに薄らいできたと言えよう。特に都市部においては、民族学校ではなく、一般に漢族の通う普通学校に就学する児童・生徒の方が増加している。要するに、同じウイグル人と言っても、全く異なった教育を受けたわけである。

話を本題に戻すと、以上のような異なった教育を受けた人は、日本語の把握も違ってくる。つまり、漢民族学校で教育を受けた人は、中国の漢字を十分に理解したと言える。したがって、日本語の漢字部分をほかの中国人のように、簡単に身につける。しかも、家庭教育によって身につけたウイグル語は前述したように、同じ膠着語に属し、文法的に日本語と似ているために、日本語文法もより簡単に把握できると考えられる。一方、民族学校でウイグル語中心の教育を受けた人は、漢語が弱い。したがって、漢字中心の日本語を学習する上では、漢字のハンディが大きく、とくにレポートや論文を執筆する時に一層難しく感じるだろう。しかし、日本語の会話のほうは得意である。

次に、文化葛藤である

ウイグル人は全民族的に、スンニ派のイスラーム教を信仰している。イスラーム教の信条は、彼らの精神世界の主軸を構成しており、家庭教育の一部とする。イスラーム教徒であるからには、日本という非イスラーム圏の国、とくに、信仰が薄らぐ国に来ること自体が、深い葛藤を感じかねない。最も問題である食物からして、誰でもハラール食品の販売場所を確認したり、食品の材料チェックをしたことがあるだろう。カタカナで書かれた食品の材料の説明を理解で

きなくて、誤って食べられないものを食べてしまった経験を持つ人も少なくないだろう。そこで、夏休みなど帰国した時に、炒めた羊肉を日本に持ってくることを食物の解決法の一つとして用いている。また、日本滞在中にハラル食品が入手できない場合は、最初はパン、ご飯と野菜のみの食生活を送った人も少なくない。しかし、肉食中心のウイグル人にとって、野菜だけの生活はアルバイトと学業両立するには体が持たないために、市販の牛肉や鶏肉、ラム肉を購入せざるを得ない。

ウイグル人が直面する葛藤は、食生活だけにとどまらない。モスクが遠いからなかなか行けない、学校や住まいの周辺に礼拝する場所がない。そのような理由で定められた礼拝時間に場所を問わず礼拝したら、日本人に白い目で見られたり、アルバイト先で怒られてしまうなどの問題にも及ぶ。

ところが、ウイグル人の適応心理と適応方式は、全員が同じわけではない。筆者は今回のインタビュー調査を通じて、同じウイグル人といっても、新疆の出身地の違いによって、日本社会の異なる生活手段、異なる適応方式を選択するということがわかった。

新疆のはほぼ中央に位置する天山山脈は新疆を南・北と二分する。南疆では、ウイグル人の単一民族構成地域が多く、他民族との交流機会が少なく、閉鎖や半閉鎖的な状態の伝統的なウイグルの生活を維持している。また、敬虔なイスラーム信徒が多く、濃厚なイスラーム色を持っている。それに対し、北疆では、漢民族人口が一番多く、イスラーム教を信仰する人の割合が低い。しかも、ロシアの影響が浸透したカザフスタンとの国境になっているために、その生活様式にロシア文化の痕跡が見られる。多文化現象が共存する地域である。

来日したウイグル人は、自分が育った生活様式をそのまま持って来たのである。イスラーム信仰が強い南疆出身の人は、イスラームの観点から、日本人の「無宗教主義」に対して理解しがたく、一層自分の信仰を深めていこうとする。また、食生活をはじめ、イスラームの戒律をきちんと守る。それに対し、混合文化の下で育った北疆の人は、より開放的であり、日本の世俗に対して寛容な態度を取る。しかも、食品に対しても、外食や市販の豚肉（豚と関係するすべてのもの）さえなければ、食事をする。イスラーム行事において、年に何回かの祭りのモスクでの礼拝は行なうが、普段、家での五行を守る人が少ないので

ある。要するに、南疆出身の人が抵抗を感じつつ、適応性がより緩慢なことに
対し、北疆の人の適応性は相対的に早いのである。

ここで、在日ウイグル人の適応問題において、その差異をもたらしたもう一つ
の要因を説明しておきたい。

先だって、日本語の把握状況の説明において、「民考民」「民考漢」のことに
触れた。適応問題においても、「民考民」「民考漢」の差異¹⁰を明らかにしなければ
ならない。なぜなら、彼らは、受けた教育によって、異文化に対する理解
が異なるからである。まず、漢族の学校で中華文化中心の教育を受けた人は、
日本で教育を受けている第二代のウイグル人のように、言葉はもちろん、考え
方すら自分が属するその集団に従うものである。家庭の小集団と異なる学校と
いう大集団に馴染んでいく経験があるからこそ、日本という新たな大集団に馴染
みやすいのである。次に、家庭文化と違う学校で自分は特別な存在であるこ
とを覚悟しており、周囲の違う文化で育った人たちと絶えず摩擦しているうち
に、異文化に対して深い理解ができる。したがって、異文化の理解を経験した
「民考漢」は、日本にきて、今までの経験を再び活かすことができ、適応も容
易である。

「民考民」は、漢語教育以外に、学校や家庭ではウイグル文化中心の教育を
受けてきた。自分が属している集団は、自分と同じ考え方を持つ人々ばかりで
あり、異文化に接する機会が少なかったと言えよう。したがって、「職場では、
漢語が得意ではないので、漢族とコミュニケーションを上手く取れない。考え
方が違うから、相手が言っていることが理解できない」と語る人がある。日本に
来て、完全に自分が属した集団を離れ、自分の文化を知らない新たな集団に出
会うことになったために、カルチャー・ショックを受けやすいのであろう。

「民考民」のことに触れる時、もう一つの集団を説明する必要がある。彼らは、
「民考民」でありながら、大学は中国の内地で学習した人たちである。彼らは、
中国内地において、まず、言語ができないと生活できないという経験をしてい
る。次に、食生活において、現地の食生活に慣れて行く努力をした経験がある。

10 中国少数民族地域において、漢語教育中心の漢民族学校と少数民族教育中心の少数
民族学校がある。少数民族で、漢民族の学校に通う人を「民考漢」、少数民族学校に
通う人を「民考民」、漢族で、少数民族学校に通う人を「漢考民」という。

また新たな大集団で摩擦した経験がある。彼らにとって、異なる文化を持つ中国内地に行くことは、国境を越えたようなものである。したがって、来日したことは、初めての経験ではないのである。

おわりに

以上、日本における中国ウイグル族の生活実態を明らかにしてきた。中国のマイノリティであるウイグル人の日本への移動は、中国の改革開放に基づく中国人口移動の一環である。彼らの在留形態、学習や労働過程、収支構造など表面的な特徴から見ると、ほかの在日中国人と同様であるものの、各個人の生活様式に独特な民族性が強調されている。さらに、同じウイグル人であっても、その出身地域と属した教育集団の違いによって、日本社会の異なる生活手段、異なる適応方式を選択している。したがって、在日ウイグル人の生活様式の生成過程は、多文化を融合する過程でもあると言えるだろう。

本稿では、在日ウイグル人の生活様式を明らかにすることを試みた。日本在住ウイグル人の事例研究を行ない、考察することは、多重文化の影響を受けたウイグル人のアイデンティティのあり方を捉えて行く上で不可欠なものである。今後の課題としてあげられるのは、いうまでもなく第一次資料の増加であり、さらに詳細に調べていくことである。在日ウイグル人のネットワークの構成、在日漢民族の関係などについては、紙面の制限があるために、ここでは、扱わないことにした。また稿をあらためて論じることにしたい。